

満洲史と東北史のあいだ

— 稲葉岩吉と金毓黻の交流より —

毛利英介

Between the History of Manchuria and that of Dongbei:

the Relationship between INABA Iwakichi and JIN Yufu as

Observed in Jingwushi – Riji

MORI Eisuke

This paper is an investigation of the relationship between Inaba Iwakichi, regarded as the key figure in prewar Japan in the field of Mansenshi, or Manchurian-Korean history, and Jin Yufu, seen as the founding figure in China of the field of Dongbei-shi, or Northeastern history.

Inaba Iwakichi and the nature of his work on Mansenshi has already attracted a certain amount of historiographical attention. However, this has primarily been from scholars concerned with Korean history. This paper will analyze Inaba and his Mansenshi from the perspective of Manchurian history. In this regard, it will focus on the relationship between Japanese research in Manchurian history and what may be regarded as its Chinese counterpart, research in Northeastern history. Specifically, it will examine the relationship between Inaba Iwakichi and Jin Yufu, the Chinese pioneer of Northeastern historical studies, using Jin's diary, *Jingwushi riji*, as a primary source for examining Jin's perspective on his relationship with Inaba.

はじめに

いわゆる「満鮮史」に対する史学史的な関心は、近年の日本において一貫して存在するよう
に思う。その中でも、井上直樹『帝国日本と〈満鮮史〉 大陸政策と朝鮮・満洲認識』（塙書房、
2013）は現段階での到達点と言えよう¹⁾。そして同書で取り上げられる人物の一人として稲葉岩
吉（君山）がおり、彼に関連しても満鮮史という観点から近年立て続けに研究が提出されてい
る²⁾。

稲葉は1876年に新潟県で生まれ、1940年に当時の満洲国都である新京（現長春）で没した。
代表的満鮮史学者として、また時局的な発言者として知られる。内藤湖南を師と仰ぎ、満鉄の
満鮮地理歴史研究事業や朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業に従事した後に、満洲国立建国大学の教
官となった。膨大な業績を残すが、本稿の行論上からは『清朝全史』と『満洲発達史』をその
代表作として挙げておく³⁾。

帝大出身ではない稲葉の歩みは、当時の学界における主流とは言えないだろう。ただ、確か
にその経歴は、大陸政策と密接な関係のあった戦前・戦中期の日本の東洋学のあり方を示す事
例として注目されるに足るものがある。しかし、もはや満洲史という枠組みが存在しない以上
当然かも知れないが、上記の近年における日本での稲葉に対する関心は、主に朝鮮史からのも
のである。一方中国では、例えば李錫厚が稲葉を日本軍国主義の御用歴史学家と見なすように⁴⁾、
稲葉は満洲史学者としても良くも悪くも有名であり、まさに満鮮史学者たる稲葉に対する視覚
としては偏りがあるろう。本稿はその欠落を補うことを意図するものである⁵⁾。

ただし、稲葉の満洲史学者としての側面も一編の文章で論じ尽くせるわけもなく、本稿にお

1) 同書に対する書評としては、古畑徹（『東洋史研究』72-4、2014）と濱田耕策（『朝鮮学報』230、2014）
によるものがある。なお、以下では用語・固有名詞等は基本的に当時のものを使用するが、特段の他意は
ない。「満洲」については、中国側から見た場合には「東北」とする。

2) 滝沢規起「稲葉岩吉と「満鮮史」」（山田賢編『中華世界と流動する「民族」—東アジア社会変動に関す
る研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科、2003）・寺内威太郎「「満鮮史」研究と稲葉岩吉」（寺内威太
郎・李成市・永田雄三・矢島國雄『植民地主義と歴史学—そのまざしが残したのもの—』刀水書房、2004）・
桜沢亜衣「「満鮮史観」の再検討—「満鮮歴史地理調査部」と稲葉岩吉を中心に—」（『現代社会文化研究』
39、2007）。

3) 稲葉の事跡に関しては、前注所掲の諸研究のほか、稲葉自らの手による「予が満鮮史研究過程」（稲葉博
士還暦記念会編『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』稲葉博士還暦記念会、1938）を参照。

4) 「論遼朝的政治体制」（『歴史研究』1988-3、『臨漢集』（河北大学出版社、2001）再録）。

5) 戦前の満洲史研究については、塚瀬進「戦前、戦後におけるマンチュリア史研究の成果とその問題点」
（『長野大学紀要』32-3、2011）参照。

いては視点をしぼり、満洲史のカウンターパートと言うべきである中国の東北史の開基者と目される金毓黻⁶⁾との交流を描くことによってその基礎的研究の一としたい。

次にその金毓黻についても紹介をしておく。金毓黻は漢軍旗人の家系に属する人物であり、1887年に現遼寧省遼陽市で誕生し、1962年に北京市で亡くなった。北京大学を卒業した後は東北の張氏政権の官僚の道を歩み高位に到るも満洲事変に遇い、軟禁の後に数年間満洲国に出仕している。その後、日本での文献調査を機に中国本土に亡命した。日中開戦後は四川に移っていた東北大学⁷⁾の教官を務めるなどし、戦後は北京大学教授・中国科学院研究員となるという経歴を歩んでいる。北京大学出身の近代中国人としての面と、遼陽の旗人社会で育ちその人脈の中で官僚として歩んだ東北人としての面の双方を持つのが金毓黻の特徴と考える⁸⁾。編著作としては、『渤海国志長編』（金氏千華山館叢書、1933）・『東北通史』（国立東北大学東北史地経済研究室、1941）・『中国史学史』（商務印書館、1944）・『宋遼金史』（商務印書館、1946）⁹⁾などが有名である。

金毓黻については、その1920年から1960年に渉る日記、『静晤室日記』が排印公刊されている¹⁰⁾ので、本稿では積極的に利用する。そのため、本稿の叙述は金毓黻の見た稲葉という姿が基本となる。また、この日記は学術筋記的な性格が強いことから、基本的に金毓黻の読書と著述から分析を行う。

金毓黻については、近年、大陸中国でもあらためて注目が集まっており、例えば『静晤室日記』に着目した著作として霍明琨『東北史壇巨擘金毓黻 《静晤室日記》研究』（黒竜江大学出版社、2013）が刊行されている。膨大に存在する金毓黻の事跡に関する研究は、その「参考文献」を参照されたい。なお、本稿が論じる稲葉との交際についても、その第五章において一定の紙幅を割いて紹介されていることを付言しておく。

6) 「東北史の開基者」としての金毓黻に言及する文章は多い。金毓黻の多くの評伝がそうであるほか、例えば李治亭主編『東北通史』（中州古籍出版社、2003）の前言は度々金毓黻に触れる。

7) 東北大学は、元来は瀋陽に設立された張氏政権における最高学府である。満洲事変後は移動を繰り返し、最終的に日中戦争開始後に四川省三台に落ち着いた。王振乾・丘琴・姜克夫編著『東北大学史稿』（東北師範大学出版社、1988）参照。

8) 遼陽の旗人社会については、江夏由樹「旧奉天省遼陽の郷団指導者、袁金鎧について」（『一橋論叢』100-6、1988）を参照。

9) 『中国史学史』及び『宋遼金史』については初刊本原本を閲覧できなかったため、本稿執筆に当たってはそれぞれ「民国叢書」所収影印本を利用した。

10) 遼瀋書社、1993。原本は吉林省社会科学院図書館蔵。以下同書については「日記」とのみ表記するほか、本稿中の年月日のみの記述は同書が典拠である。年月日の年号表記は西暦に統一する。

第一章 二人の出会いまで

稲葉と金毓黻が初めて直接対面するのは後述のように1932年のことであるが、少なくともそれ以前から金毓黻はいくつかの著作により稲葉の名を知っていた。一方、すでに1927年に『遼東文献徴略』という学術編纂物を公刊し¹¹⁾、東北学社という学会を主宰してもいた¹²⁾ものの、満洲事変以前の金毓黻の本分は張氏政権の官僚であり、後日におけるような学者としての存在ではなかった。よって本章では、二人が出会うまでの、著作を通じての金毓黻の稲葉に対する接近について述べていく。

第一節 『清朝全史』をめぐる

満鮮史に関わるものを含め多くの業績で知られる稲葉だが、こと中国に与えた影響の大きさで言えば『清朝全史』に指を屈するだろう。『清朝全史』は1914年に日本で早稲田大学出版部から出版された後、直ちに同年中華書局から但燾の翻訳により漢訳版が出版されている。筆者が実見した漢訳『清朝全史』は近年のリプリント（上海社会科学院出版社、2006）のほか京都大学経済学部所蔵の原本であるが、これは1935年に出版された第17版である。中国で相当版を重ねて読まれていたことが分かる。

そして本書は単に中国で広く読まれたというだけでなく、他の書物にも影響を与えた。その中で代表的なのは、蕭一山『清代通史』である。蕭一山はそもそも同書の執筆の動機において稲葉の『清朝全史』を意識しており、このことは『清代通史』が語られるときには必ずと言っていいほど言及される¹³⁾。また、『清代通史』が具体的な部分でも稲葉の影響を受けていたことは、夏竦「評蕭一山著《清代通史》」¹⁴⁾に分析がある。

ここでは、行論上いま一つ『清朝全史』に影響を受けた書物の例を挙げておきたい。それは、呂思勉『自修適用白話本国史』（商務印書館、1923。以下、『白話本国史』と略記。）の特に清代に関わる部分である。筆者の見るところ稲葉の『清朝全史』への言及が15箇所以上存在する。そして、中国本土に関する部分は敢えて外国人の研究を利用する必要がないからか、その言及

11) 少なくとも1931年の段階では稲葉は『遼東文献徴略』を目にしている（『満洲開国説話の歴史的考察』下、『青丘学叢』6、1931、『光海君時代の満鮮関係』（大阪屋号書店、1933）再録）。

12) 「東北学社与東北叢刊」（卞宗孟『東北文献叢譚』1、北平民友書局、1934）参照。

13) 1934年の「清代通史下巻講稿弁論集序」（『非宇館文存』（経世学社、1948、文海出版社、1973影印再版）巻5）、王家范「蕭一山与《清代通史》」（『歴史研究』2006-2）参照。

14) 『図書評論』2-5、1934、『夏竦文集』下（社会科学文献出版社、2000）再録。

は対外関係および清朝開国期の部分に集中する¹⁵⁾。

さて『清代通史』と『白話本国史』を『清朝全史』の影響を受けた書物の例として挙げたのは、日記によれば、金毓黻はこれらをいずれも読んでいたことが知られるからである。以下、日記の該当部分について検討していきたい。

金毓黻は『清朝全史』を1925年11月20日に購入している。1926年の4月9日および11日には同書をひも解くとあるも、本格的に読み始めたのは1926年11月8日からのようであり、翌27年5月11日に読み終えるまで熟読したことが日記からうかがえる。金毓黻がここまで熟読した日本人の著作は、本書および下記『満洲發達史』という稲葉の両書のほかには、鳥山喜一の『渤海史考』（目黒書店、1915）がある程度である¹⁶⁾。

実は、『清朝全史』を購入してから閲読開始までに金毓黻が読んでいた書物が、1925年12月2日に購入した呂思勉の「中国史」すなわち『白話本国史』である。時期的な関係から、同書で金毓黻が特に関心を持つ清初史の部分に『清朝全史』が盛んに引用されているのを見て、あらためてその価値を認識し熟読するように至ったものと推測する。

さて、金毓黻が呂思勉の書物を読んだのは偶然とは思われない。呂思勉は1920年代初頭に瀋陽高等師範学校に赴任していた¹⁷⁾。そして、当時の呂思勉門下の人物である卞宗孟と金毓黻は長く密接な交際をもつこととなるのである¹⁸⁾。卞宗孟に限らず、当時呂思勉と関係のあった人物は瀋陽（＝奉天。以下、書名等の固有名詞を除き瀋陽に統一）において珍しくはなかったであろう。なお、瀋陽高等師範学校は東北大学の前身となる存在である。

さらに、その卞宗孟の記述から呂思勉は授業において稲葉書を参考文献として挙げていたことが想定される¹⁹⁾。東北においても稲葉の著書の優秀性への認識は一定程度広まっていたと言え

15) その他、孟森の『満洲開国史』（上海古籍出版社、1992）、『清朝前紀』（商務印書館、1930）にも稲葉の『清朝全史』が頻繁に引用される。孟森のこれらの著作は元來講義録であるが、例えば論文でも「清太祖起兵為父祖復仇事詳考」（国立北平故宫博物院編『国立北平故宫博物院年刊』国立北平故宫博物院、1936、『明清史論著集刊』（中華書局、1959）再録）などが同様である。

16) 公刊はしていないが、金毓黻は『渤海史考』を漢訳させている。このことは『渤海国志長編』附録2に記されているほか、鳥山喜一「渤海国をめぐる二つの新著を手にして」（『青丘学叢』14、1933）によれば鳥山本人にも伝えている。

17) 俞振基『高廬問学記—呂思勉生平与学术』（生活・読書・新知三聯書店、1996）のp221等関係箇所参照。なお本稿との関連で言えば、呂思勉の瀋陽赴任を周旋したのは姉夫である後出の楊成能であったという。また、金毓黻自身、呂思勉の瀋陽高等師範学校の『高師月刊』（＝『高師周刊』）所載「論整理旧籍之方法」を読んでいる（1921年6月9日）が、当時金毓黻は在吉林であった。

18) 日記では1924年8月28日が卞宗孟の名の初出のようである。以下中国の文化人については、橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（中華法令編印館、1940）参照。

19) 卞宗孟「東北歴代民族考略」（『東北雑誌』6-11、1924）では呂思勉はもちろん稲葉の名も大きく取り上

る。

次に、先述のごとく金毓黻は蕭一山『清代通史』も読んでいる。1928年5月10日には、蕭一山の『清代通史』の清初の部分は稲葉の『清朝通史』の引き写しだ、と言う感想を述べており、一方1929年9月5日の感想によれば、一見すると稲葉の方がよさそうであるとしつつも、いくつかの理由を挙げて蕭一山に軍配を上げている。ただし、この時も稲葉が「創作」であり蕭一山は「因成」であるとしており、稲葉の『清朝全史』に対する高い評価は変わらない²⁰⁾。ちなみに、金毓黻と蕭一山は後に日中戦争の際に四川で出会い、ともに四川に移った東北大学で文学院・文科研究所の教官として名を連ねることになるが²¹⁾、ここでは詳細は置いておく。

第二節 『遼東志』をめぐる

『遼東志』は明代の遼東の地方志であり、ここで取り上げるのは前田家尊経閣蔵本を底本に尊経閣叢書として1912年に高木亥三郎により出版されたものである。その解題は稲葉によるものであった。日記には、金毓黻が1926年5月31日に長春でこの書物を購入したことが明記されている。金毓黻は当時『遼東文献徴略』の編纂の一環として地元遼陽で新たに出土した明代の「天王寺碑」²²⁾の検討に取り組んでいた折りでもあり、同書中に関連史料を見つけて大いに喜んでいいる。解題に言及があるのは同年8月15日であり、稲葉による解題が優れたものであることを認めた金毓黻は、漢語への下訳をさせうえで自身がそれを整えたことを述べている。『遼東志』は後に漢訳解題も含めて金毓黻の編纂した「遼海叢書」に収録されることとなる。

順序は前後するが、稲葉のこの解題が優れていたことは金毓黻の稲葉に対する評価をさらに上げ、上述のように『清朝全史』の熟読のもう一つの要因となり、また解題の翻訳は下記の『満洲発達史』の翻訳にも結びつくこととなると考える。

げる。卞宗孟が呂思勉を通じて稲葉を知った可能性は充分考えられよう。

20) 参考までに記せば、和田清『中国史概説』下(岩波書店、1951)の文献概説では、魏源『聖武記』や蕭一山『清代通史』に言及しつつ「実は清朝史に関しては稲葉君山博士その他に幾多の論作があるが、いずれも少し杜撰に近いので、ここには省く」とし、『清朝全史』を名指しはしないが極めて低評価を下すほか、神田信夫『『聖武記』雑考』(『東方学会創立四十周年記念東方学論集』(財)東方学会、1987、『清朝史論考』(山川出版社、2005)再録)は「清朝史の概説として名高い我が稲葉岩吉氏の『清朝全史』や、中国の蕭一山氏の『清代通史』の記事の中には、殆ど『聖武記』の翻訳か引用と思われる箇所もみられる」とする。ただし、これらはむしろ『聖武記』の影響力の大きさという視点から語られるべきかもしれない。

21) 臧啓芳『国立東北大学廿週年記念冊』(文海出版社、1973影印)、前掲『東北大学史稿』参照。

22) 『満洲金石志稿』2(南満洲鉄道株式会社、1939)参照。

第三節 『満洲発達史』をめぐる

『満洲発達史』は、『清朝全史』出版の翌年の1915年に大阪屋号書店から出版された。稲葉の「通史もの」としては『清朝全史』と双璧といえる書物である。日記では1927年の4月24日からこの書物への言及が始まり、7月16日に読み終えている。ただし、漢訳本はなかったため日本語原文の拾い読みで、意を解さない部分も多かったようである（5月15日）。しかし、その重要性を認めた金毓黻は、交流のある楊成能に翻訳を依頼し²³⁾、自らが編集の責任者である『東北叢刊』に連載することにした。この翻訳連載には章士釗の難色（1930年7月31日）等もあったが、金毓黻は敢えてこれを行った。ただし、途中まで連載したところで満洲事変が勃発したことにより『東北叢刊』も停刊し、連載は中絶することとなる。

金毓黻の『満洲発達史』に対する評価は高かった。具体的には、1932年12月13日、傅斯年等『東北史綱 初稿』（中央研究院歴史語言研究所、1932）²⁴⁾の未刊の明清部分の油印本を、在瀋陽のドイツ人満洲語文献研究者であるワルター・フックスを通じて読んだ金毓黻は、「日本の書籍によるところが多く、極めて稲葉君山の『満洲発達史』に似ている」という感想を残している。更に1933年3月1日には、実名を挙げないが傅斯年の書物、即ち『東北史綱』を得てこれについて言及をしている。それは、美点を幾つも挙げつつも、一言目に「殊に失望した」というものであった。贅言を用せば、『東北史綱』は、中国において「東北」と銘打った通史の先駆けとして、金毓黻自身が後に著わす『東北通史』と並んで有名な書物である。

さて、この『満洲発達史』の翻訳は後にやや複雑な経緯をたどり、これに基づき二種の漢訳本の登場を見ることとなる。以下その事情について述べておこう。

一つは『東北開発史』（辛未編訳社、1935）と名を変えて北京で出版されたもの。これは、『東北叢刊』所載のものに、その後出版された増訂版の『満洲発達史』（日本評論社、1935）を参照しつつ、未訳部分を補って卞宗孟が出版したものである。卞宗孟の序によれば、稲葉の日本の侵略の手先としての面を告発する目的があったとする。今ひとつは、1940年、創氏改名により「新馬晋」となっていた金九経が介在し、また当時満洲にいた稲葉自身も関わり、かつ元来の訳者である楊成能によって未訳部分を訳出して『満洲発達史』の原名で瀋陽において出版さ

23) 楊成能については、蔡鴻源『民国人物別名索引』（吉林人民出版社、2001）、楊成能作・楊業英編著『曩吾詩書画選』（国家広電総局文印中心、2006）を参照。

24) この書物は日本人にも注目された。特に英文抄訳（李濟訳）の *Manchuria in History, A Summary*, Peking Union Bookstore, 1932と合わせて、リットン調査団との関係で執拗に批判を加えるのが矢野仁一『満洲国歴史』（目黒書店、1933）の「満洲は支那の完全な一部であるといふ支那の学者の主張を駁す」である。三島一（実際は柴三九男）「満洲史研究序説」（歴史学研究会『満洲史研究』四海書房、1936）は、『東北史綱』と矢野の『満洲国歴史』の双方の恣意性を指摘する点で興味深い。

れたものである²⁵⁾。

以下、時期が降るが『満洲発達史』にまつわる話を続ける。1938年3月13日、既に中国本土に亡命し紆余曲折を経て四川に逃れていた金毓黻は、卞宗孟から『東北開発史』、即ち金毓黻が訳させた稲葉の『満洲発達史』を得ている。実は、かつて金毓黻はこの書を有していたようだが既に紛失しており、再度この書を得て「宝」だと喜んでいる。一方、瀋陽での『満洲発達史』訳本の出版を金毓黻が知ったのは日中戦争が終了した後であり、日記では1946年8月1日に記されている²⁶⁾。

その他、金毓黻は稲葉の著作としては『朝鮮文化史研究』（雄山閣、1925）も入手している（1929年1月21日）が、管見では同書に関しては日記に特段の記載は見当たらない。

第二章 二人の交流

第一節 交流の経緯

満洲事変後に金毓黻の交際相手には日本人が増え、その結果日記にも多くの日本人の名が見える。当時の日本の主要な満蒙・満鮮研究者で、金毓黻と全く関係が無かった人物のほうかむしろ少ないだろう。そのような中でも日記に特に登場回数が多い一人が稲葉岩吉である。

確認の限り、二人の間の接触の端緒となるのは、1931年の3月下旬に東北を訪問して金毓黻と交流を持った黄炎培が次に日本へ向かう途中の京城で稲葉を訪問し、金毓黻に、稲葉が金毓黻との文通を願っていることを伝えてきた時（同4月11日）である²⁷⁾。しかし、金毓黻と稲葉の二人が実際に対面するのは1932年7月11日、稲葉の瀋陽訪問時まで下る。そして、その後1936年に金毓黻が中国本土へ亡命するまでの数年間、金毓黻と稲葉の交流が展開される。いうまで

25) 金九経については、新馬晋名義の「或る日の乾隆帝」（『収書月報』60、1941）を含む自著のほか、『倉石武四郎中国留学記』（中華書局、2002）p11の注や金文京「韓国の中國學研究の現状紹介」（『中国文学報』81、2011）参照。満洲国成立後は、副館長即ち金毓黻の秘書（通訳）を兼ねた国立奉天図書館の司書として（『館務要録』（『国立奉天図書館季刊』1、1934）参照）金九経はしばしば金毓黻と行動を共にすることとなる。

26) ちなみに言うならば、金毓黻は中華人民共和国成立後も勉強のために稲葉の『清朝全史』・『満洲発達史』を読むことがあった（1956年10月30日）。

27) 黄炎培は自著『朝鮮』（商務印書館、1929）において金毓黻の『遼東文献徴略』を引用していることもあり、著作を通じては既知の仲であった。また『朝鮮』p5によれば黄炎培と稲葉の二人も黄炎培の前回1918年の朝鮮訪問により旧知の仲であった。なお、東北・朝鮮訪問の間の黄炎培の動静は許漢三『黄炎培年譜』（文史資料出版社、1985）でも伺える。また、金毓黻の「瀋陽蒙難記」（日記1931年9月21日。ただし、これは後に南京で1937年2月に書いたもの）によれば、後に中国本土への亡命の際に金毓黻は上海で黄炎培に助けを求めることとなる。

もなく、実際の出会いが翌1932年まで下った原因はその間に勃発した満洲事変に求められよう。

二人が初めて会ったその日の稲葉の発言に金毓黻は深い印象を受けたようだが、これは次章で触れることとなる。そしてこの際二人は図書館・博物館・文叢閣を見学した。また、稲葉は金毓黻に「近著」を贈っている²⁸⁾。

この日の夜に稲葉は長春へ向かったが、14日には瀋陽に戻って園田一亀²⁹⁾・植野武雄³⁰⁾等の在瀋陽の日本人や他の中国人も交えつつ再び金毓黻と会っている。稲葉が長春に向かった目的には、6月30日付けの内藤湖南の稲葉宛の書簡³¹⁾によれば本庄繁・石原莞爾という関東軍幹部に面会することがあったようだが、『本庄繁日記』（山川出版社、1983）には面会の記録は見当たらない。

この後24日、すでに朝鮮に戻っていた稲葉から園田一亀を通じて金毓黻に『東国通鑑』・『海東繹史』が贈られた。従前これらの書物を金毓黻は満鉄図書館で借閲（1932年5月31日）しており、稲葉はその不便を対面中に聞いたものと推測する。これに対して金毓黻は『東北叢刊』所載の自らの文章を贈り、さらに先日の対面の際に稲葉が言及したという『青丘学叢』掲載の渤海関係史料³²⁾を贈って欲しいと求めた。そして、その書簡においては金の稲葉に対する思いが述べられている。それは

『清朝全史』を読んで敬意を感じて十数年、その後『満洲発達史』を友人に訳させて『東北叢刊』に載せもした。最近『渤海国志長編』を撰するにも『満洲発達史』の啓発を大いに受けた（後略）

というようなものである。『清朝全史』を読んだのが十数年前というのは時期的に合致しないが、基本的に既に見た事実が述べられる。外交辞令を割り引くとしても、稲葉との対面がなかった金の喜びが見て取れるのではないだろうか。

そしてこれより二人の交際が展開されるのだが、以下では箇条書き風に二人の交流を示していく。

28) 金毓黻は1933年3月12日に「契丹の横宣横賜の名称」（『史林』17-1、1932）に言及しているので、特段贈られたとの記述はないものの、この時に稲葉から贈られた可能性がある。

29) 園田については、原直史「園田一亀と歴史研究—ある在「満州」日本人の言論軌跡に関するノート—」（『環日本海論叢』17、2000）参照。

30) 当時、満鉄奉天図書館に勤務。『満支典籍考』（奉天大阪屋号出版社、1944）などの著述で知られる。

31) 書簡No.694（『内藤湖南全集』14、筑摩書房、1976）。

32) 恐らく「北青城串山城女真字摩厓考釈」（『青丘学叢』2、1930）か。この論文には渤海に関する言及はないが、串山城が渤海の南京である可能性はすでに池内宏（「朝鮮咸鏡南道の古城に就いて」『史学雑誌』31-5、1920）が指摘していた。

8月21日には金毓黻はやはり稲葉の近作「清初史料」を読んでいる。この年11月に『青丘学叢』に発表される「塗改本清太祖実録残巻及び其年代」³³⁾であろうか。これもいずれかの段階で贈られたものかもしれない。

9月20日、間もなく京城を訪問しようとする金毓黻はあらかじめ稲葉に書簡を送って連絡をした。これに対して園田一亀経由で稲葉は、間もなく(10月8・9日)京城で行われる拓本展のために遼陽の「白喇嘛碑」(=「大金喇嘛法師宝記」)及び瀋陽の経幢の拓本を所望した(日記同年9月26日)。拓本展前に金毓黻がこれらを実際に贈ったかどうかは不明だが、「白山黒水貞石拓本の展覧」³⁴⁾によれば目録中に「瀋州経幢」が含まれている。そして、7月29日の時点ですでに金毓黻は日記において「瀋州経幢」に言及している。これらのことから、金毓黻が元来手元にあった拓本を稲葉に贈ったという可能性はあるだろう³⁵⁾。一方の「白喇嘛碑」に関しては、後述のとおり後に稲葉に贈られている。また、下って12月12日には稲葉に求められたことを契機として実際に金毓黻は遼陽にこの「白喇嘛碑」を見学に行っている³⁶⁾。

10月15日から20日にかけて金毓黻は予定どおりに朝鮮を訪れ、16日には京城帝大で稲葉のほか鳥山喜一・藤塚鄰に面会している。

10月31日、瀋陽に戻った金毓黻に稲葉より書簡があり、朝鮮王朝で『宋史』の改作としてもなされた『宋史筌』の序を、11月23日には「弘法大師為藤大使致渤海王子書」³⁷⁾を贈られている。これは、朝鮮行の際に依頼したものであったようだ。

1932年12月14日頃、稲葉から金毓黻に書簡が届き、高麗「原州興法寺真空大師塔碑」の拓本を贈られている³⁸⁾。これは金毓黻から遼碑の拓本を贈られた返礼のようである。また、この書簡では『大氏族譜』に言及がある。これは後に金毓黻の『渤海国志長編』に取り入れられるものである。この際の「遼碑」が何を指すか明らかではないが、当時慶陵の哀冊群とともに把握さ

33) 『青丘学叢』10、1932。

34) 『青丘学叢』10、1932。

35) この経幢には園田一亀の研究(「奉天故宮前の「石経幢」年代考」『満蒙』16-10、1935、あるいは同名、奉天図書館叢刊24、1935)がある。

36) この碑は、数十年来稲葉の関心対象であったものである(『清朝全史』緒言)。内容は鴛淵一『満洲碑記考』(目黒書店、1943)参照。

37) 『遍照發揮性靈集』巻5所載。『渤海国志長編』巻18、7書状に引用。『渤海国志長編』附録2でも稲葉が金毓黻に示したことが述べられている。

38) この碑は当時稲葉が所属した朝鮮総督府の管轄にあった。朝鮮総督府編『朝鮮金石総覧』上(朝鮮総督府、1923)・葛城末治『朝鮮金石攷』(大阪屋号書店、1935)参照。また、同碑については中国でも劉喜海『海東金石苑』により清代から知られていた。

れたばかりであった「賈師訓墓誌」³⁹⁾の可能性を想定したい。恐らく更にこの返礼でもあろう、金毓黻も稲葉に「崔源墓誌」等の金毓黻の地元である遼陽関連の碑文二種の拓本を稲葉に贈っている。

1933年1月13日、金毓黻は稲葉に『武経総要』抄本を贈っている。金毓黻は、『渤海国志長編』巻1に『武経総要』前集巻16下北蕃地理を引用している。

1933年1月19日、これに対し稲葉の返書が届いている。内容は、『武経総要』を受け取ったことのほか、「遼道宗哀冊考」（詳細不明）を最近著わしたこと等であり、同時に『大東金石書』（京城帝国大学法文学部、1932）を贈っている。金毓黻は23日にさらに返書を認めているが内容は不明である。

1933年8月21日、稲葉は金毓黻に書簡を送り、内藤湖南の娘婿・鴛淵一を紹介した。金毓黻は返書に附して、先述の「白喇嘛碑」を含め地元遼陽関係の拓本三種を稲葉に贈っている。

1933年8月31日、金毓黻は稲葉から自著「申叔舟画記」の掲載された『美術研究』（19, 1933）を贈られている。

1933年9月19日、稲葉から金毓黻に書簡が送られ、そこでは渤海史関連の史料として大江匡房の『江談抄』の一節が示されている。これは『渤海国志長編』補遺に引用される。

1934年2月22日、朝鮮から瀋陽にやってきた稲葉と金毓黻は会い、朝鮮関連の会話をもった。この内容は24日の条に箇条書きされている。なお、金毓黻は稲葉に義県万仏堂⁴⁰⁾の拓本等を贈った。

同年8月16日、金毓黻はまた瀋陽に来た稲葉と会い、稲葉は金毓黻に朝鮮で新たに出版された『楽学規範』（古典刊行会、1933影印）を贈っている。金毓黻は翌日も稲葉とともに行動し、『清実録』を見たほか拓本を贈るなどしている。

1935年2月25日には、金毓黻は稲葉を介して朝鮮総督・宇垣一成から申緯『詩次故』（矢野義男、1934影印）⁴¹⁾を贈られている。

1935年3月3日、また朝鮮から瀋陽にやって来た稲葉と金毓黻は面会した。この際は園田一亀と金九経が同席した。この時二人は1934年2月22日に続き『瀋陽日記』・『瀋陽状啓』などの

39) 羅福頤『満洲金石志』（満日文化協会、1937、新文豊出版公司、1977再版）巻2参照。『渤海国志長編』補遺でも引用される。

40) 『満洲金石志』巻1参照。

41) 洪憲の手による影印本序によれば、本書の影印事業は宇垣総督の意志によるものであったという。本稿執筆に当たっては、東京大学東洋文化研究所図書館所蔵本を確認した。なお寄贈印によれば、同本は稲葉による寄贈である。

清初の史料について会話を持っている。そしてこれが二人の最後の対面となった。4月2日再び金毓黻は日記に稲葉が清初の史料について語ったことを記しているが、これはあらためて書簡を受け取ったものだろうか。

1935年10月7日、金毓黻に稲葉より書簡があり、渤海関連の議論がされていた。このことは稲葉の「金静庵氏著渤海国志長編を読みて」にも「今は去年以来、同君と往復弁難したものの一二を捫撫し、君が大著の批評に代へた次第である。」旨が記されている⁴²⁾。12日、金毓黻は稲葉に贈る詩を作っている。恐らく7日の書簡への返書に載せるためのものか。

また、稲葉は「満洲史の現状」において金毓黻が「遼海叢書」にいわゆる燕行録である『瀋陽録』・『燕台再遊録』を収めたことを称している⁴³⁾。実は、この文章発表の時点では金毓黻はすでに中国本土へ逃れている。ただ、稲葉のこの評価は、満洲国時代の金毓黻に対するものと言ってよからう。

以上、やや煩雑ではあるが金毓黻と稲葉の相互訪問と書簡の往來の記述を、主に金毓黻の日記によりつつ検討を加えた。二人の交流の盛んなさまがここから充分に見て取れる。そして、例えば儀礼的な書簡に関しては日記に全てが挙げられているとも限らないので、実際にはより多くの書簡のやりとりがあった可能性もある。他にも、例えば金毓黻の朝鮮訪問から間もなくに刊行された『高麗史節要』を金毓黻はいずれかの時点で入手しているが、これなどは稲葉が見出し⁴⁴⁾ 稲葉の所属の朝鮮総督府より出版されたものであり、稲葉から金毓黻に贈られた可能性は十分に想定できる。つまり、書物等のやりとりも上記以上にあったかもしれないのである。

一つ付け加えるなら、1932年7月14日の二人の対面時、7月24日・9月26日・12月14日の書簡等のやりとりの際にいずれも園田一亀が介在しているのは興味深い。確言は出来ないが、二人を引き合わせるのに園田の媒介があった可能性も想定されよう。

第二節 交流の広がり

金毓黻と稲葉の二者間の関係は、ただ単に二人の間関係だけに止まるものではなく、稲葉を通じて金毓黻は日本の学者たちとの交流をもつこととなった。本節ではその場面を行論の都合上から瀋陽と京城に分けて述べる。

42) 『青丘学叢』23、1936。

43) 『青丘学叢』27、1937、『支那近世史講話』（日本評論社、1938）再録。なお稲葉は『青丘学叢』17、1934にこれら両書の書評も掲載している。

44) 「高麗史節要の由来」上・下（『芸文』18-4・5、1927）。

i 瀋陽での出会い

まずは、稲葉の紹介によって瀋陽で金毓黻と接触した人物について述べたい。

1933年3月6日（日記では翌日に記載）に、金毓黻は稲葉の紹介で法制史学者の滝川政次郎と面会している。滝川は後に稲葉同様に建国大学教授となる人物でもある。その際の学術的会話の内容は、日記及び滝川の文章の双方に記される⁴⁵⁾。滝川自身は稲葉の他に市村瓚次郎の紹介状も携帯したと述べているが、金毓黻は滝川が稲葉の紹介でやってきたと日記に記している。

このほか、より重要なのは、上掲のように同年8月21日にやはり稲葉の紹介をうけ、金毓黻は鴛淵一と知り合っていることである。この鴛淵の来訪は、内藤湖南の意を受けて、稲葉も関与して内藤が途中まで刊行していた「満蒙叢書」⁴⁶⁾と金毓黻が「東北叢書」⁴⁷⁾をうけて計画する「遼海叢書」の関係について相談する（同22日）ものであった。そして31日には金毓黻は再び鴛淵と会って送別の詩を詠んでいるが、この時、金毓黻は鴛淵に内藤への書簡を託している。これは同年10月15日以降の、翌年には死去する最晩年の内藤と金毓黻との対面につながる。

下って1934年8月16日、この日稲葉と面会した金毓黻は鴛淵とも会っている。この鴛淵の瀋陽訪問は広島文理科大の修学旅行として来ていたようだが⁴⁸⁾、金毓黻は「遼海叢書」に収めるために、『雪展訪碑録』と『瀋陽日記状啓』の入手に関して鴛淵に内藤との仲介を依頼している。金毓黻にとってやはり鴛淵は内藤の代理人であったといえよう⁴⁹⁾。

1933年10月15日から18日の金毓黻と内藤の対面時に内藤が詠んだ詩は「次遼陽金静庵贈鴛淵女塔詩韻却寄」として「湖南詩存」にも収録されている⁵⁰⁾。この時「旅順鴻臚井刻石」⁵¹⁾と「丸都紀功碑」⁵²⁾の拓本も内藤から金毓黻に贈られている。金毓黻はこの時の内藤の詩と自身の和詩を

45) 「満洲の学者を訪ねて」（『東亜』6-7、1933）。

46) 「満蒙叢書」については、「満蒙叢書刊行に就て」（『目録書譚』弘文堂書房、1948、『内藤湖南全集』12、筑摩書房、1970）収録）参照。

47) 「東北叢書」は、元来は金毓黻以前に奉天教育庁長であった謝蔭昌の創唱によるものだが、その後東北学社の事業として実質上金毓黻の計画であったと言っている。「編印東北叢書之擬議」（前掲『東北文献叢譚』1所収）参照。謝蔭昌については、田邊種治郎編『東三省官紳録』（東三省官紳録刊行局、1924、リプリント日本図書センター、1999再版）参照。

48) 「旅行の思い出と女真字碑文に就いて」（『史学研究』6-2、1934）。

49) 鴛淵が満洲において内藤の代理的存在であったことは、岡村敬二「内藤湖南と日満文化協会—外務省文化事業部宛内藤書簡を中心に—」（『人間文化研究』3、2000）に「外務省記録」に基づき記述がある。

50) 『内藤湖南全集』14（筑摩書房、1976）。

51) 鴻臚井と内藤の関係については酒寄雅志「唐碑亭」、すなわち「鴻臚井の碑」をめぐって」（『朝鮮文化研究』6、1999、『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001）再録）参照。なお、金毓黻が携わった『奉天通志』金石志に所載の拓本写真は、内藤から三多に贈られたものである。

52) 『満洲金石志』巻1参照。

稲葉にも送っている（10月24日）。金毓黻が、内藤との関係を、稲葉を通じてのものだと意識していたことによると考える。

実は、内藤が1932年11月22日に稲葉に贈った書簡には「奴児干史料の件御示被下候石本拝見を楽しみ居候」という文言がある⁵³⁾。石本、即ち拓本が存在する奴児干史料としてはまず有名な永寧寺碑文が想起されるが、これは内藤にとっても既知のものである⁵⁴⁾ことから除外される。よって、ここで話題となっているのは「崔源墓志」⁵⁵⁾である可能性が高いと感じる。何故なら、この日から間もなく金毓黻が稲葉に「崔源墓志」拓本を贈ることがあったことは上述のとおりであるためである。よって、ここでいう奴児干史料が「崔源墓志」とすれば、稲葉が内藤への書簡で奴児干へ言及したのは金毓黻経由の情報によるものである可能性もあろう。この推定の当否はともかく、稲葉そして鴛淵を経由することで金毓黻は内藤湖南との関係をもつに至ったのである。

ここで、先に言及した「遼海叢書」の形成について述べておこう。

鴛淵が金毓黻に提示したのは、正確には「滿蒙叢書」を受けての「滿洲叢書」の計画であるが、その案と「遼海叢書」では『瀋陽日記』・『滿洲祭神祭天典禮』・『東三省輿地図説』・『東北辺防輯要』・『西伯利亞東偏紀要』が重なっている。さらに、元来「滿蒙叢書」の計画にあったものの実現せず、後に「遼海叢書」に収録されたものを列举すると

『松漠紀聞』・『双溪醉隱集』・『遼東行部志』・『東三省輿地図説』・『東北辺防輯要』・『西伯利亞東偏紀要』・『扈從東巡日録』・『全遼志』・『柳辺紀略』・『滿洲祭神祭天典禮』・『鳳城瑣録』がある。1933年9月1日の時点で金毓黻が鴛淵に示した「遼海叢書」目録案には、第三集以降は未定としつつも、これらはいずれも入っていなかった。よって、これら列举した書物が「遼海叢書」に収録されたのは、両者のすり合わせの結果と考えられる。「東北叢書」の計画の基礎のもと、旧「滿蒙叢書」計画も照らしつつ「滿洲叢書」案を取り入れながら「遼海叢書」の書目は決まっていたと概括できよう⁵⁶⁾。

ただ、繰り返しとなるが「遼海叢書」は「東北叢書」を受けて金毓黻自身が従前計画してい

53) 書簡 No.704 (『内藤湖南全集』14、筑摩書房、1976)。

54) 1929年の記年のある「奴児干永寧寺二碑補考」(『読史叢録』弘文堂書房、1929、『内藤湖南全集』7、筑摩書房、1970収録)及び内藤乾吉による『内藤湖南全集』7「あとがき」参照。

55) 『滿洲金石志』巻6。楊暘・袁閏現・傅朗云『明代奴児干都司及其衛所研究』(中州書画社、1982) p73以降も参照。

56) 両叢書の関連自体は衆知のものであり、例えば外山軍治の「遼海叢書」書評(『東洋史研究』2-1、1936)等に指摘がある。なお、金毓黻は下宗孟により以前から元来の「滿蒙叢書」の計画一覧を知っていた(日記1930年8月24日)。

たものでもあり、さらに袁金鎧の金銭・学問的な援助によるところが大きい⁵⁷⁾。このように、稲葉を経由しての内藤湖南との関係による部分と、金毓黻の従来の東北での計画とが組み合わさり「遼海叢書」は成立したものであった。

ii 京城での出会い

次に、1932年に金毓黻が当時の稲葉の勤務地であった京城を訪ねることで接触を持った人物について述べたい。鳥山喜一によれば、この訪問は金毓黻が稲葉を経由して鳥山に連絡をとろうとし、その結果として京城を来訪したものであった。東京城（渤海上京遺跡）出土物や『渤海史考』に関する問い合わせが目的であったという⁵⁸⁾。この京城訪問では、先述のように金毓黻は10月16日に稲葉・藤塚と鳥山に会ったほか、18日にも鳥山を訪れている⁵⁹⁾。

上述のごとく、鳥山喜一の『渤海史考』は稲葉の著作と並び金毓黻が特に愛読した日本人の著書である。そして、その著者の鳥山との直接の接触はこの機会が初めてであった。鳥山と知り合った金毓黻は同年11月21・22日に瀋陽で鳥山の訪問を受けるほか、後に渤海上京遺跡調査にも参加している（1933年6月15日）。鳥山は「渤海国をめぐる二つの新著を手にして」で金毓黻の来訪および文通について歓喜と責任という言葉を使いつつ触れ、また瀋陽訪問の際に『渤海国志長編』の原稿を見たというほか⁶⁰⁾、「奉天における契丹哀冊について」⁶¹⁾でもこの瀋陽訪問が述べられる。金毓黻が渤海関係の話題について鳥山に送った書簡は日記の1933年3月7日に載る⁶²⁾。

なお、京城での面会者のうちで、金毓黻は後に1933年8月22日に藤塚の訪問も受け、また1933年4月14日には『鳳城瑣録』を贈られており、この書物は「遼海叢書」に収録されることとな

57) 「遼海叢書」所収の書物に袁金鎧の協力を仰いだものが多いことは、叢書末尾の提要を参照。また金銭的援助でも臧式毅・熙洽の次に袁金鎧の名が挙げられる（日記1933年10月12日）。

58) 「板振鎌東獄に下される事—渤海王国との交通挿話—」（『ドルメン』2-4、1933）

59) 18日の訪問時に渤海に関する会話を持ったことは鳥山も述べている（『渤海史上の諸問題』（風間書房、1967）p221）。

60) 『青丘学叢』14、1933。『渤海国志長編』の原稿は、その他に少なくとも和田清・滝川政次郎も見ている。それぞれ「満洲旅行談」（『史学雑誌』44-1、1933）、前掲「満洲の学者を訪ねて」参照。

61) 『京城帝大史学会報』5、1933、『朝鮮文化史観』（刀江書院、1935）再録。この論文では、袁金鎧と金毓黻が哀冊の拓本を多く作り配っていたという記述も興味深い。

62) 鳥山は、日中終戦後も1957年の訪中考古学視察団の駒井和愛を介して金毓黻と僅かながら連絡をもっている。鳥山喜一「渤海文化の跡を求めて」（『渤海史上の諸問題』風間書房、1967）参照。これは、金毓黻と駒井も面識があったからであった。金毓黻が駒井と日本滞在中に東京で会ったことは日記（1936年4月24日・27日）で触れられるほか、東京城の発掘にも金毓黻と駒井はともに参加していた。東亜考古学会編『東京城 渤海国上京竜泉府址の発掘調査』（東亜考古学会、1939）の序説を参照。

った⁶³⁾。

さて、金毓黻は日記にこの朝鮮訪問で入手したい本の多くを手に入れたと述べる（1932年10月19日）が、実際にどのような書物を得たかは明言していない。瀋陽帰還の翌日32年10月22日から「朝鮮訪書記」を撰しているがこれも内容が不明である⁶⁴⁾。しかし、この時に入手した書物には朝鮮書・朝鮮での刊行物等が多かったと考えるのが自然であろう。『渤海国志長編』編纂開始の際の参考書目（1931年11月12日）には朝鮮書は『渤海疆域考』が挙げられるのみであり、これにしても『渤海国志』とともにすでに「求恕齋叢書」として中国で刊行されていたものであった。しかし、最終的に公刊された『渤海国志長編』附録2には13種の朝鮮書が挙げられている。このうち、例えば清代から中国で知られている『高麗史』・『東国通鑑』等はおき、その他はこの数年間に、具体的にはこの京城行で得たものが多かったと推測する。島田好も、金毓黻が『渤海国志長編』編纂に際して大連・京城にまで足を伸ばしたと述べている⁶⁵⁾。

『渤海国志長編』の特徴が『渤海国記』・『渤海国志』に比してその日本・朝鮮史料の博搜にあることは周知のとおりである。金毓黻は早く満洲事変以前から渤海関連の書物の編纂を企図していたが（1924年9月15日）、このような日本・朝鮮史料をも利用したものに仕上がったのは、こと朝鮮史料に関しては研究の参照・史料の入手ともに稲葉等在京城の日本人との関係なくしてはありえなかった⁶⁶⁾。『渤海国志長編』の謝辞で掲げられる三人の日本人の名は、京城の稲葉・島山、そして満鉄奉天図書館の植野武雄の順であった。

第三章 その後

1936年、『奉天通志』の編纂を終えて区切りをつけた金毓黻が日本調査を機に中国本土に亡命したことにより⁶⁷⁾、金毓黻と稲葉の交流は途絶えた。日本との関係が深くならざるを得ない中、金毓黻としては強硬手段しかなかったのだと推測する⁶⁸⁾。そして『朝鮮史』の編纂終了により稲

63) 藤塚も、金毓黻に同書を贈りそれが「遼海叢書」に収められたことについて『清朝文化東伝の研究—嘉慶・道光学壇と李朝の金阮堂—』（国書刊行会、1975）p56で述べる。『鳳城瑣録』の著者博明（蒙古旗人）は、中朝交流という文脈の中で藤塚の関心の対象となっていた人物である。

64) 日記1932年9月21日には、京城で島山の「渤海上京竜泉府」を得たいとは述べている。『渤海国志長編』附録2の書目に島山の『渤海上京竜泉府考察記』を挙げていることから、入手に成功したと考えていだろう。

65) 「新刊紹介・渤海国志長編」（『書香』62、1934）。

66) 『渤海国志長編』附録2では、『渤海史考』について「本書が最も多く依拠したのは、『渤海国志』のほかでは、この書である。」と述べる。

67) その経緯については「瀋陽蒙難記」（日記1931年9月21日）参照。

68) 金毓黻の日本との関係の深まりはその一家（子女甥姪）の日本留学に見て取れる。日記1937年4月26日

葉は入れ替わるように朝鮮総督府から建国大学に転じて金毓黻のいなくなった満洲に移って来たが、1940年の稲葉の死去により二人の会う機会は無縁になったのだ。かつて金毓黻が副館長を務めた満洲国立奉天図書館に稲葉の旧蔵書が納められることになった⁶⁹⁾のは奇縁である。すでに亡命して当時四川に移っていた金毓黻が稲葉の死を知ったのは翌1941年5月11日、『史学雑誌』の記事によってであった⁷⁰⁾。日記にはこのために文章を作ったという記述があるが、その内容は不明である。

その1941年、金毓黻は四川における東北大学の名のもと『東北通史』（上編）を出版した⁷¹⁾。蕭一山の『清代通史』が稲葉の『清朝全史』に対抗して書かれたものであるなら⁷²⁾、金毓黻の『東北通史』は稲葉の『満洲發達史』に対抗した位置を占めると言ってよからう。

金毓黻が東北史を著すこと自体は長年の計画であった⁷³⁾。しかし、日中戦争中に東北史を公刊することは、それ自体が政治的色彩を帯びることとなる。1939年に書かれた『東北通史』の引言に、言わば決まり文句ながら「東北史研究が中国より日本で盛んなのは不自然だ」と述べているのはその現われと言えよう。故にこそ、主にこの書物によって金毓黻は後に東北史の開基者扱いされることとなる。

そもそも金毓黻が1920年代に『満洲發達史』を読んでいた時期に東北の通史として構想した『東北通典』は、「通典」の名のとおり紀・伝等からなる体例によるものであった（1927年5月16日）。満洲国時代に金毓黻が関与した編纂物にしても、例えば『奉天通志』などは同様に伝統的な性質を持つものである。それがその後『東北通史』のように「近代的」な形式の著作を刊

と日華学会学報部『中華民國廿五年日本昭和十一年留日学生名簿』（文海出版社、1971影印）を照らし合わせると、金長城が東大、長衡が京大・東北大、長佑が早稲田、金淑君が日本女子大、淑鉞が東高音楽（東京音楽学校？）・武蔵野音楽学校の所属である。長銘は所属は不明だが東京大森在住であった。

69) 中見立夫「稲葉岩吉の旧蔵書を追って」（松原孝俊『台湾・朝鮮・満州に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本古典籍の書誌的研究』科学研究費報告書、2001所収）

70) 稲葉の死亡記事は『史学雑誌』51-8、1940に掲載。

71) 上編だけとなったのは史料を失ったためであったが（編印縁起）、計画は存在し（1941年8月21日）、上編には下編の広告も出されていた。また死の直前まで金毓黻は構想を有していた（1960年1月16日）が、下編はついに発表されることはなかった。

72) 付言すれば、蕭一山の『清史大綱』も日中戦争中に四川で刊行されたもの（経世学社、1944）である。

73) 『東北通史』は、編印縁起に明らかなように、実際には金毓黻が東北大学に着任するより前に南京の中央大学での講義との関連で執筆されたものである。なお、『東北通史』の前身である『東北史稿』には謝国楨の序がある（『東北史稿跋』（『馮貢半月刊』7-1・2・3、1937、『瓜蒂庵文集』遼寧教育出版社、1996再録）参照）。金毓黻が傅斯年に『東北史稿』を見せたことも日記に記述があり（1937年1月11日）、その際『東北史綱』に言及した書簡を附して送っている。

行することとなったのは、一つには先立つ『東北史綱』の影響を受けた部分であろう⁷⁴⁾。ただし、同書は基本的には古代部分しか成立しておらず、本稿で論じてきたような状況を考慮すれば、『満洲発達史』の影響が大きかったと考える。その点、「東北史」は「満洲史」の中から生まれた、と言えなくもない⁷⁵⁾。

明けて1942年、金毓黻は日記の抜書きである『東北文献零拾』をやはり東北大学から出版している。その最終巻である巻6 雑録の末尾には日本に関する記述を幾つか載せ、そこに「稲葉君山論治史」という項目を立てて、1932年に初めて稲葉と会った際の会話を収録している。現在の北朝鮮に属す北青の古城や女真文字史料に関する情報のほか⁷⁶⁾、遼東の歴史研究のためには朝鮮から手を着けるべきであり、稲葉はこれを内藤湖南から聞いた、という内容である⁷⁷⁾。実は、金毓黻は内藤本人からも同様の話をされている（1934年10月24日）ののだが、あくまで稲葉の話として記していることは注目される。この当時、内藤は勿論のこと稲葉もすでに故人であったとはいえ、四川に移った東北大学に属する金毓黻が、満洲国立である建国大学の教授を務めた人間に対して肯定的ともとれる言及をした文章を公表するのは、重いものがあるのではないだろうか。

少し時間的にさかのぼるが、1938年2月16日、日中開戦後も北京に残留していた明清史家の孟森の死⁷⁸⁾を聞いた時の金毓黻の感想は、「明清史研究で有名な孟森だが、清朝入関以前の史実に重点を置いた点は丁度稲葉のようである」というものであった。金毓黻は孟森にも会ったことがあり（1937年1月30日・31日）、その評価は高いものがあつた。金毓黻にとって稲葉と孟森の二人が清史研究者としての双壁だったようだ。

74) 『東北史綱』の未公開である方壮猷の執筆部分（「安東都護考」）については参照を明言している（1937年1月4日）が、方壮猷の文章は津田左右吉「安東都護府考」（『満鮮地理歴史研究報告』1、1915、『津田左右吉全集』12（岩波書店、1964）再録）が藍本だとも述べる。

75) 趙中学「近代東北移民開発史研究的回顧」（中央研究院近代史研究所編『六十年来の中国近代史研究』下、中央研究院近代史研究所、1989）は、『満洲発達史』を指して『東北通史』の未刊部分に対する貴重な補充だとするが、かかる状況を踏まえれば意味深長に聞こえる。なお正確を期すならば、戦後の中国大陆における東北史研究が金毓黻の示した枠組みの中で行われたとは必ずしも言えない。金毓黻が時に東北史の開基者とされるのは、むしろ象徴的な意味が強いただろう。

76) これは前掲「北青城山山城女真字摩崖考釈」として文章化されているものである。

77) 稲葉と内藤の関係は有名であるが、稲葉が日常内藤の話をしてきたことは末松保和「朝鮮史の研究と私」（『日本歴史』560、1995）参照。稲葉は前掲『光海君時代の満鮮関係』自序でも「満洲歴史の研究は、朝鮮に遺存するところの史料を検討することによりて、格別の収穫を期し得べしといふ先輩の指示、及び自らの信念」と述べる。

78) 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末一補注『北京苦住庵記』ならびに後日編一』（岩波書店、2004）にも言及あり。同書は『北京苦住庵記一日中戦争時代の周作人』（筑摩書房、1978）の改訂版である。

金毓黻の人生はその後1960年代まで続く。しかしそれはもはや稲葉の死後であり、金毓黻と稲葉の関係を見る本稿の視野からは外れる。よって本稿の論述もここでおく。そして、それは日中の学界の交流自体も低調な時代であった。

おわりに

以上、本稿では日本の満洲（満鮮）史の大家である稲葉岩吉と中国の東北史の開基者とされる金毓黻、この二人の関係を追った。

第一章では、張氏政権時代における金毓黻の稲葉の著作への接し方について述べた。本論で言及したごとく、稲葉の代表的著書の一つである『清朝通史』は中国でも民国期において広く読まれ、金毓黻もその読者の一人であった。しかし、金毓黻は他の人々と異なりさらに稲葉の著書、とりわけ『満洲発達史』に拘っていく。そもそも、東北で東北人意識が強く且つ歴史に造詣の深い知識人は稀少であり、その意味では金毓黻が稲葉を意識し、『満洲発達史』の翻訳へと至ることとなったのは必然であったとも言える。

第二章では、満洲国出仕期の金毓黻と稲葉の関係、そしてそこから広がるその他の日本側の人物との関係について述べた。それは、金毓黻が以前から私淑していた人物である稲葉と直接交流できることでもあったが、それを通じて、満洲の地元の学者を巻き込みたいという日本側の全体的な思惑に絡めとられる過程でもあった。満洲には羅振玉一族を筆頭に著名な学者もいるにはいたが、金毓黻のように東北出身のものはあまり目に付かない。金毓黻はその意味でまたとないターゲットであった。これは金毓黻が京都側の名指しの提議により日満文化協会の理事に追加されたことから明らかである⁷⁹⁾。

しかし、満洲国時代の金毓黻は、それまで官僚として多忙だったことにより実現できなかった東北各地での現地調査や更には日本本土や朝鮮への訪問など、結果的に最も学術的には充実していたように思える。そして、それは日満（満日）文化協会の理事・満洲国立奉天図書館の副館長としての立場を通じてのものであり、上述のように金毓黻の代表的編著群にも日本の学者たちとの関係が反映されていた。そこには稲葉の姿もある。

そもそも満洲国時代も含め東北時代の金毓黻には東北人としてのメンタリティーから東北を一定の地域として見ようとする意識があった⁸⁰⁾。その意識には、一面で稲葉を初めとする日本

79) 「外務省記録」に基づき岡村敬二「羅振玉と日満文化協会―人事問題をめぐって」(『人間文化研究』5、2001)に言及がある。「京都側」とは、日満文化協会との関わりから見て最終的には内藤湖南の意思ということになるが、内藤湖南と金毓黻の間のルートとなると稲葉→内藤ルートも大きいのではないだろうか。

80) 金毓黻が張政権の官僚であった際に執筆した「東北講学之今昔観」(『東北叢刊』9、1930)には「東北

の学者とも通じるところがあったと言えよう。つまり異夢であっても同床であった。本論で述べた「満蒙叢書」と「遼海叢書」という二つの叢書の計画の重なりなどはその証といえる。そして、金毓黻が中国本土人の東北に対する「文化果つる地」との偏見に憤懣を持っていたことは日記の解説でも言及されていることである⁸¹⁾。

無論、満洲国時代の金毓黻の学術活動は、複雑な政治情勢の中での処世でもあったろう。これは、日記1933年8月17日の記述によれば、森赴の「忠告」もあったという⁸²⁾。これに関連して、例えば橋川時雄はその『満洲文学興廃考』（文字同盟社、1932）において、金毓黻と交流の深い袁金鎧や金梁等を指して「美術を以てその政治を潤飾につとめたる人物」と述べる。師たる袁金鎧に比して金毓黻の学者としての比率は高いだろうが、これと共通する姿ではあろう。そして、そもそもこのような学者と官僚・政治家が不分というあり方は中国の伝統的スタイルとも言える。一方で、そのように身を処さなければならない状況を逆に利用しつつ、満洲事変以前からの計画に基づき、金毓黻は「東北（遼海）叢書」・『遼寧（奉天）通志』・『渤海国志長編』という編纂物をそれぞれさらに発展・完成させたとも言える。そしてこれら叢書・書物の編纂にも直接・間接に稲葉との関係が見て取れる。

第三章では、満洲国を離れた後の金毓黻から見た稲葉について述べた。稲葉の死後を含む時期である。

この時期、稲葉が朝鮮から満洲に移り建国大学の教授という立場となった一方、金毓黻は満洲国を離れて中国本土に逃れ、そして日中開戦後は四川の東北大学へ着任することとなった。そして、その地でも満洲国にいた時とは全く逆の立場で東北を学問的に象徴させるのに有用な人材となった⁸³⁾。

具体的に見てみよう。前掲『国立東北大学廿週年記念冊』の「本校出版書刊」では、その時

は、我々東北人の東北である。」という一節が存在する。あくまで特定の状況で記されたものとはいえ、金毓黻の考え方の一断面をよく表しているように感じる。なお、政権・時代を貫く東北の在地の論理という視点については、前掲「旧奉天省遼陽の郷団指導者、袁金鎧について」に言及がある。

81) 関連して民国期の三つの代表的な渤海関係資料集について言うと、『渤海国志』の唐晏、『渤海国記』の整理者である奉寛、そして『渤海国志長編』の金毓黻は、偶然でもあろうがそれぞれ満・蒙・漢の旗人であった。ここにも金毓黻を単純に近代中国の史学者と呼ぶだけで済まされないものがあると感じる。

82) 「瀋陽蒙難記」（日記1931年9月21日）も参照。森の満洲での文化政策に対する関与は衛藤利夫「文遼閣の危機」（『図書館雑誌』37-3、1943、『鞆鞆—東北アジアの歴史と文献—』衛藤利夫記念事業会、1956再録）、その経歴については秦郁彦編『日本陸海軍総合事典（第二版）』（東京大学出版会、2005）参照。

83) そもそも金毓黻は瀋陽時代の東北大学と関係を有しており、そのような経緯からも東北大学の教官としては打って付けの人物であった。前掲『国立東北大学廿週年記念冊』p8によれば金毓黻は1931年3月に東北大学の委員となっており、日記1931年3月24日でも同様の旨が記される。

点での東北大学出版物は九つ挙げられる。そして、その半ばに近い『東北通史』・『東北文献零拾』・『遼海書徴』・『東北古印鈎沈』という「東北」という言葉が目につく一連の著作は金毓黻の手によるものであった。さらに張亮采編『補遼史交聘表』も金毓黻の指導下の著作である⁸⁴⁾。つまり、『志林』・『東北集刊』・『学友通訊』という三種の雑誌を除けば、ほとんどが金毓黻に関連するものである⁸⁵⁾。その結果が「東北史の開基者」としての金毓黻であった。

金毓黻にとってかつて中国本土とは異なる性格を有する独自の地域であった郷土東北は、こうして中国の一部としての東北へと変わっていった。そこで象徴的に思われるのが金毓黻の『宋遼金史』である。同書の刊行は1946年をまつこととなるが、その執筆は1940年には開始されていたようである（1940年12月16日）。その第一章「総論」で金毓黻は以下のように述べる。

宋の君主が漢族に出自することは歴史家がみな認めるところであるが、遼・金はそうではなく、一つは契丹に出自し、一つは女真に出自するのであって、ともに東北一隅に居る夷狄であり（皆為居於東北一隅之夷狄）、……

馮家昇も述べるように、元来中国本土の学界は東北の歴史にさほどの注意を払っていなかった。それが、満洲国の成立という事態が中国史の一部としての東北史を求める状況を作り出した⁸⁶⁾。つまり、満洲国の成立は中国本土での金毓黻の需要を高めることとなったと言える。そして、金毓黻の亡命と研究の変化はこれに沿うものでもあった。このことから考えると、金毓黻を単純に中国の東北史家であったと捉えるのは実は危険であり、彼は中国の東北史家に「なった」というのが正確であるように思う。

この時期の金毓黻は、公的には稲葉を批判すべき立場でありつつ、個人的には稲葉への敬意を保ちつづけていたように感じる。無論、若き日に日清・日露戦を身近にした東北の知識人たる金毓黻に元来日本に対する警戒があったのは言うまでもなく、稲葉の『満洲発達史』にしても「用意の所在は別在り」とも述べている（1929年12月20日）。他方で、両国間の緊張関係においても敬意をたもつ個人的関係自体は、実際には当時の日中間において決して珍しくはなかったはずではある。しかし、金毓黻の私淑から始まったその稲葉との関係は、一度交わった後に各々が学問上から満洲そしては東北を代表する立場へと至った点で象徴的である。

84) 『補遼史交聘表』の序文は金毓黻によるものであり、その中で張亮采が金毓黻に「問業」したと述べられる。ただし、本稿執筆に当たって原本を見る機会を得なかったため、ここでは影印本（大立出版社、1984）を利用した。また中華書局から1958年に出版された重印版冒頭の小記も参照。

85) 実際には、『志林』・『東北集刊』にも金毓黻は多くの文章を発表している。前掲『東北史壇巨擘金毓黻』の「参考文献」参照。本稿執筆に当たっては、「中国期刊彙編」所収の影印本により確認した。

86) 「我的研究東北史地的計画」（『禹貢』1-10、1934）

